

The Well-Beloved (『愛されし者』)

—— 芸術家の帰郷の物語 ——

栗 林 智 子

トマス・ハーディの作品、特に彼の小説には、互いに矛盾し合う多くの要素が含まれているが、作家としての彼は一貫して後ろ向きであり、空間的にも時間的にも回顧的な姿勢を保っていたと言えるだろう。つまり、彼は常に過去をふり返り故郷をふり返っていたということである。Jude the Obscure (『日陰者ジュード』) を筆頭に後期の作品ではテーマと表現法の両方において二十世紀にむかい前進しようとする作者の姿勢が読みとれる、とする批評家も少なくない。しかし、Jude 執筆後ハーディが小説の筆を折り若き日に憧れた詩の世界へ帰っていったこと、また彼が詩においても再び Wessex という過去の世界に執着したことを考えると、その説は説得力に欠けると言わざるを得ないのである。回顧的な作家としてのハーディの資質は *Far from the Madding Crowd* (『狂乱の群を離れて』) や *The Return of the Native* (『帰郷』) 等の初期の作品によくあらわれ、前者は既に失われた Wessex の昔ながらの共同体を描いて賛美し、後者はいったん故郷を出て都会に暮ってしまったために帰郷を望んでもうまくいかないで苦しむ青年を主人公としている。後期の傑作である *Tess* と問題作の *Jude* の二作品では帰郷願望が理想追求のテーマに取って代わられているが、これは小説の舞台として Wessex 世界が衰退し崩壊していったために、帰るべき過去も故郷も持たない主人公たちが自分のアイデンティティのよりどころを外に求めていったのである。だが、*Tess* においても *Jude* においてもハーディは Wessex 世界の呪縛を逃れ得なかった。肉体を捨てて自ら理想の女と化し、死によって現実世界の束縛を脱した Tess はともかく、Jude は最後まで現実の壁を乗り越えられず絶望的な死を迎えている。Jude の作品自体も既に廢墟と化した Wessex の世界から脱出し得ない。Jude が新しい生の形を見つけられなかったようにハーディも新しい小説のあり方を見い出せなかったのである。

Jude や *Tess* と同じ頃に発表されたやや短い作品 *The Well-Beloved* は、芸術家を主人公にすることによって小説家として行き詰ったハーディの苦悩をグロテスクとも言えるほどに露骨に描き出す。と言うよりも、

Jude や *Clym* よりさらに自分によく似た、自己の分身とも言える彫刻家 Pierston を寓話的で非現実的な小説の枠組の中で生きさせることにより Wessex 小説の作家としての自分の生に終止符を打とうという明確な意図がハーディにはあったのかもしれない。いずれにせよ、帰郷のテーマと理想追求のテーマとを芸術家の生を通して結びつけたこの小品はハーディ理解の上で絶対的な価値を持つと私は信じている。ここでは *Jude* その他三作品にざっと目を通した後 *The Well-Beloved* の上記二つのテーマをやや詳しく分析してみたい。

I 放浪者ジュード

先程も述べたが、*Jude* と *Tess* とは探求——理想追求の物語である。この二作品は、特に *Jude* では、理想と現実の対比及び登場人物の幻滅と敗北感がコントラストの強い色彩で描き出されている。*Jude* は人間として *Tess* の持っているような「自分性」を確立していないために作品を支える柱になりえず、きっちりまとまった珠玉作 *Tess* とは対照的に *Jude* はあいまいでばらばらだという印象を与える。*Jude* の「自分性」の無さ、彼の内なる空虚さは彼の生い立ちや Wessex 世界との関わり方にその原因があるものと思われる。

Jude は孤児である。幼い時に死に別れたため両親の記憶もない。彼には過去あるいは過去の記憶、つまり個人としての歴史や歴史の観念が全く欠けているのである。数少ない血縁のうちの一人、大伯母の Drussila の許にひきとられて Marygreen という小村で幼年期を過ごす。この場所も彼の故郷とはなり得なかった。まだ鉄道は通っていないが、現代化の名の下に、昔の住居が取りこわれ古くからの教会も安っぽい新しい建物に取って代わられている。農村共同体としての Marygreen の歴史の舞台であったはずの穀物畑も *Jude* の目にはただの労働の場としか映らない。*Jude* が個人としての歴史を奪われているようにこの村は土地としての過去の歴史を奪われているのである。

過去を断ち切れ故郷を持たない、時間・空間両面での放浪者 Jude は、その不安定感から逃れようとして更に深みにはまってゆく。よそ者としてどうも好きになれない土地 Marygreen にあって彼がまず自分の支えにしようとしたのは Christminster という土地とそれに象徴されている学問の歴史という過去とであった。母を憶えていない彼は Christminster を 'Alma Mater' と呼び、自分はその 'beloved-son' になるのだと希望に胸をふくらませる。しかし十年後苦勞の末にようやく憧れの土地に辿り着いた Jude に Christminster の町は冷淡だった。最初の日に Jude はまるで幽霊のように夜の街をさまよい歩くが、その後も彼はこの地において幽霊のごとき存在で居続ける。街を闊歩する学生や教授たちにとって彼は存在していないも同じだし、かと言って庶民の一人として生きることも肯じえない彼は、学問や学問の街以外のところに心の置き場所を求め始める。彼の心の中では従姉 Sue の存在がどんどん大きくなってゆく。

そもそも彼が実際に Christminster に出て来る決心をしたのは大伯母の許で見た Sue の写真がその直接のきっかけだった。この街に住んでいるというだけで Jude は Sue を Christminster の街やその学問と結びつけてしまう。また彼は従姉が教会用具店で働いているところをのぞいたり教会で盗み見したりして彼女を宗教とも結びつける。学問、宗教、そして Christminster の街を Jude は Sue の後ろに透かして見て彼女を宗教的に崇拜する。こうして、Sue はキリスト教的な歴史を背負わされた上に、血を分けた従姉として彼の母代わりと見なされ、Jude の過去との断絶感を救う女神として崇められる。だが現実の Sue は Jude の考えているイメージとはまるで異なる存在である。彼女はキリスト教の伝統には軽蔑しか感じず、非常に現代的な割り切り方をするか、或いはさらに時間を遡って古代ギリシャに自分の生き方の範を求めようとする。審美的な理由だけによるのかもしれないが異教の神々の像を部屋に飾ったり農業博覧会で花の匂いに酔いしれて「ギリシャ時代のよるこびに戻ったようね。」と言ったりするのである。

Jude と Sue の放浪生活は二人が空間的に根無し草であることをよく示すものだが、二人についてゆく Jude と Arabella との子、幼い Jude の姿は彼らが時間的にも根無し草であることを暗示している。Father Time とあだ名される幼い Jude はその不自然な姿形によってこの作品の時間の感覚の歪みをそのまま表わす。Jude と Arabella とが共に過ごした到底すばらしいとは言えぬ時間の産物であると同時に、Father Time のあまり

にも唐突な登場のし方や極度にシンボリックな姿の描写は Jude という作品内に走る亀裂、Jude 及び Jude の持つ過去との断絶感やノーマルな時間感覚そのものの欠落を示しているのである。Jude は子どものためにも Sue と正式に結婚しようとして決心して、立ち会い人として Marygreen での隣人であり亡き大伯母の友人であった Mrs. Edlin を呼びよせるが、これは自分と Sue の子ども時代を知っている彼女を呼ぶことで自分たちの現在と過去とを少しでも結びつけたいという彼の涙ぐましい努力のあらわれである。ところが大人三人が式の前夜昔のことを語り合っていると片隅から幼い Jude が、「お母さん、僕なら結婚はやめとくの。」と声をかけて彼らをおどろかせる。三人は彼のことを、つまり時のことを忘れて Jude と Arabella が結婚する前の昔に戻ったような気がしていたのだ。Father Time は Jude に Arabella との過去を思い出させ、自分に正しい時間感覚が欠けていることを忘れるなど Jude に警告しているのである。この作品での自分の役割の仕上げとして Father Time は Jude と Sue の間に生まれた二人の子を殺し自分も自殺することによって Jude が Arabella と過ごした過去、Sue と共有した過去の両方を抹殺する。これによって Jude は自分の過去を全て失い、さらに現在、未来を共に生きるはずだった Sue をも失って、生に意義を見出せなくなる。彼は時間感覚だけでなく場所の感覚も失い Arabella の父の新しい家に連れていかれた時も彼女に「これは昔 Marygreen にいたころの僕らの家かい？」と尋ねるのである。Sue を取り戻そうという最後の試みが失敗し Christminster の街と Arabella の元に戻った Jude は自分は「幽霊の世界にも人間の世界にも住めないんだ。」と洩らす。Jude は故郷を持たないゆえに地上で行くところがないし、自らの歴史を持たないゆえに人の歴史にも記憶にも属することができないのである。

また Jude には未来もない、と私は思う。彼は完全に Wessex 世界の産物、いやむしろその世界の崩壊の産物であり、もし Jude に二十世紀小説の始まりが見られるというのであればそれは Sue の人物像の中に求めるべきであろう。だが、Jude によって未来と未来への希望の手がかりに理想化された Sue も実際には十九世紀イギリスの因習に縛られた一人の女でしかなかった。彼女の降伏は Jude の死よりももっとはっきりとハーディの小説家としての限界を示しているのかもしれない。つまり、彼はテーマの面では Wessex 世界の外へ出て新しい生き方や価値観を見つけて Jude に示してやるができなかったし、表現の方面でも自分自身の具体的な視覚的イメージへのこだわりや細部のリアリスティックな描写に

とらわれて言わんとすることに十分な表現を与えられなかったということである。彼の表現しようとしたことは彼の小説法では到底表わし得ない類のものだったのではないか、と私は思う。Jude はまとまりのない「失敗作」となることによってハーディが新しい小説法が必要になっていることを感じつつもそれが見つからないで悩んでいるさまを主人公の放浪生活と袋小路の死によって象徴することに成功したと言えるかもしれない。

II 帰郷のテーマ

帰郷のテーマを扱った幾つかのハーディの作品の中でも、*The Return* や *The Well-Beloved* は自伝的要素が色濃く作者自身のディレンマをよく表わしている。いずれの作品でも主人公はまともな形で故郷へ帰れない。Jude と異なり Clym や Pierston には過去の記憶や故郷と呼べる土地がある。が、もちろん時間は逆流させられないし Clym の故郷 Egdon Heath も Pierston の生まれた島も人を温かく迎え入れるような土地ではない。Egdon は 'A face on which Time makes little impression' と表現され Pierston の石の島と同じく時を超越した不変性をもつ場所として描かれる。Egdon はその不変性——永続性によって過去と現在を結びつける。だが、その「過去」は「歴史以前の」「非人間的な」もので、この荒野はそこを訪れる人に畏怖の念を起こさせはしても人間の歴史内の過去と現在とが有機的につながっているという安定感を与えない。⁽¹⁾ Jude を苦しめた過去との完全な断絶感は味わわないですむかもしれないが、Egdon の有する時間の連続感や人間の生きる領域を越えたところのもので個人にとって大きな助けにはなりえない。

もちろん Egdon にも自然界や人間界の変化はある。これらの世界は一日のうちで変化し、また季節と共に変わってゆく。だが日毎の変化は Egdon 特有のどんよりした暗さによりかなり鈍らされている。外は昼でも Egdon は既に夕方、空が明るくても地上は闇に包まれ始める。ヒロイン Eustacia Vye は Egdon の荒野とこういった夜との近似性を共有しながらも Egdon の非時間性を我慢できない。彼女が Egdon を散歩する時にいつも携帯する望遠鏡と砂時計とは各々外の明るい世界への憧れと時間の経過を砂の流れという物質的な形で見て確かめたいという願望、つまり彼女の現実である Egdon の全面的否定を象徴するものである。

もう一人のヒロイン Thomasin は Eustacia と対照

的な女性で、Eustacia が嫌悪する Egdon を愛しその四季の変化（これは Eustacia にとってはどうでもいいことである）を愛し、自然のサイクルに沿って生きている。彼女は自分の回りの現実を受け入れ変化を受け入れ「Clym のように時計を逆回しして自分の不幸を治そうとしない。」⁽²⁾ 赤ん坊に対する愛と気遣いは彼女の肯定的な価値観、将来への希望に満ちた眼差しをはっきりと示すものである。

主人公の Clym は過去をあまりにも大切にすぎ、それにとらわれている。過去を代表するものとしての母親とのつながりは異常なまでに強い。彼は「母の一部」であり母の死後も彼女の影響下から脱け出せない。Egdon から彼を追いやったのは母の「息子に出世させたい」という強い望みだったが、今またその母の存在が彼を Egdon に引き戻しているのである。Egdon へ戻りたいという彼の思いは Bloom's End で母と過ごした幼年期へ帰りたいたいという願いと表裏一体のものだと言える。

しかし、それはいったん外に出て変わってしまった Clym にとっては生易しいことではなかった。本能や肉体の面では彼は「ヒースの産物」であり、故郷に帰って少したつとハリエニシグ刈りをする彼の姿はヒースの野に溶け込んで母親の目でも一般の住人と区別できなくなってしまう。彼はヒースの野に親しみを感じ Egdon の非時間性をも自分の幼年期の状況をそのまま保ってくれるものとして愛する。しかし、精神的・知的なレベルでは彼は既にこの世界の人ではない。整った彼の顔には「考える病い」が侵食し始めている。彼の精神と肉体は分離し、知性によって Egdon から疎外され感情と肉体の面で外の世界からはみ出してしまう彼はどこにも帰属できない。彼の孤立した、帰る家の無い状態は物語が進むにつれより顕わになってゆく。母という過去とのつながりを失い、ヒースから孤立した人間同志として似合いの伴侶であった Eustacia という将来への架け橋も失って一人取り残された Clym は時間的視野を失って Egdon の非時間性の中に立ちつくすことになるのである。

空間的には彼は一応 Egdon へ戻った。しかし、巡回説教師としてヒースの荒野をさまよい歩いている今の彼が本当に故郷へ帰ったと言えるのであろうか。時間的には、母を失い、唯一過去とのきずなとなり得たかもしれぬ従妹 Thomasin との再婚も逸して、過去を取り戻すことは全くできなかったと考えてよいだろう。

代わりに Thomasin を勝ち得たのはもと行商人今や農場主の Diggory Venn だが、彼はその忠誠心、忍耐強さ、勤勉さ等において *Madding Crowd* の Oak を思い起こさせる。二人の結婚も Oak, Bathsheba のそれと

パラレルである。*The Return*の第六部は *Madding Crowd* のパストラルの世界を模倣し、Clym はその中には入れない。幸せな新婚のカップルが本当のパストラルの舞台、緑の草地へと行ってしまった後、Clym は母の家に一人残って決して取り戻せぬ過去の思い出を抱きしめ後ろ向きの生を送っている。そして *The Return* 以後ハーディの主人公たちは故郷へ帰るのぞみを捨てることになる。

Ⅲ 調和と統一の世界

*Jude*と *The Return*の後では *Far from the Madding Crowd* の世界はずっと平和で安定して見える。時に劇的すぎるプロットや破壊的な出来事にもかかわらず、この作品はハーディの小説の中でも「最も楽観的かつ肯定的なもの」であり、その肯定性ゆえに「他の小説のアイロニーを理解する基盤となり得る」点でも重要である。⁽³⁾

基調はあくまでもパストラルで、舞台となる Norcombe も Weatherbury も Egdon の荒涼とした不毛性を微塵も感じさせない。牧羊や小麦畑の描写が豊富で豊穡の印象を与え、'Great Mother' と呼ばれる大自然は基本的に人間たちに優しい。羊飼いを職業とする主人公 Gabriel Oak の生き方も肯定的で前向きである。彼はいたずらに昔をなつかしんだり昔の不幸を埋め合わせようとはしない。不幸から学んでそれを繰り返さぬようにすることが彼の生き方である。その点で彼は Venn や Thomasin によく似ている。

Weatherbury 共同体の本質的な特徴はその不変性である。羊毛刈りが行われる大納屋の描写は、大納屋、そこで行われる作業、それに携わる人々が昔と同じままであることを強調している。ここでは時の流れは遅く「町の住人の『昔』は田舎の住人の『今』なのだ。」町の人 Troy の時間感覚はまるで違う。「彼にとって過去とは昨日であり、未来とは明日のことである。明後日なんて無いも同じであった。」彼は現在のみ生き、過去とも未来とも断絶している。Bathsheba を妻にできるまで何年でも待つ、その間の年月など消し去ってみせる、と時の流れを超越しようとした Boldwood が Weatherbury の共同体からはみ出してしまったように、Troy もまた過去との完全な断絶によって共同体の生き方から外れている。Bathsheba の伯父の家を「もっと今風にして、楽しくやれる間に楽しくやろうじゃないか」という彼のセリフは共同体の基盤である労働を軽んずると共に

Weatherbury の歴史を無視あるいは軽視するものである。Fanny の死後初めて自分の過去の行為をふり返りその償いをしようとした時に、村の歴史が教会の塔のグロテスクな雨樋の力を借りて彼に復讐したとしても当然である。

Oak が身につけている時計がまともに働かないことをひとつの例として、この世界では時計は無用の長物である。外の世界と異なりここでは時が前へ進まないで自然の世界とそれに調和する農耕の社会の一日の変化や季節の移り変わりに合わせて繰り返し回転するだけだからである。人々は Oak のように天体を見上げ自然の現象に注意して自分たちが自然界からはみ出していないことを確かめさえすればいい。ヒロイン Bathsheba は夫の死のショックから立ち直る時に「春と共に生き返り」夏になると家の外に姿を見せるようになるが、このように Oak や村の人々と同じように自然のサイクルに沿って生きるようになって初めて Weatherbury の生活に根が下ろせたのである。

確固とした過去との連続性と不変性を基盤にした四季の変化のサイクルを持つ Weatherbury の共同体は主人公 Oak のあり方と共にハーディにとってひとつの理想だったと思われる。しかし、それはあくまで理想であり、当時既に存在していなかったばかりか、おそらく過去のどの時代にも *Madding Crowd* の世界は存在していなかったであろう。ハーディの描いた Wessex の世界は彼の記憶と想像力から生み出された、現実（それも過去の現実）と虚構とのアマルガムであり、リアリスティックであると同時にフィクションナリティーの高い、それゆえ普遍的な価値を持つ空間だったのである。

Ⅳ 芸術家の帰郷

The Well-Beloved の主人公 Jocelyn Pierston は Wessex 地方の海岸の保養地 Budmouth のそばに突き出た半島、Isle of Slingers 出身の彫刻家である。作品につけた序でハーディはこの島（実際は半島だが本土との連結部は細く削られている）を非常に変わった場所として紹介し、この小説全体の寓話的非現実性を読者に飲み込ませようと試みている。島は「時が一つの石の塊から彫り出した」かのような不毛な岩の塊で、そこには奇妙な習慣と幻想とが息づいているという。詩人や芸術家がこの島を訪れたなら素晴らしいインスピレーションを得ることができるだろう、とハーディはこの島が芸術の源泉そのものを象徴することをほのめかす。

島はしばしば生き物として描かれる。久しぶりに帰郷した二十歳の Pierston の手に島の岩は生温かく感じられるが、「それは、今のように午後の昼寝をしている時の島の体温だった」し、石切り場の音は「島のいびき」としてとらえられる。第二部第三章で二番目の Avice が陣痛に苦しんでいる場面では島を取り囲む海と一緒に呻き声を上げている。島はその上に立っている石造りの家々のみでなくそこに住む人々とも一体なのである。島と家と人間は一つの生命体を形成する。が島は石の島であるゆえに不毛な死の島でもある。草木は乏しく島で唯一まともな木々が生えている Sylvania Castle は「名前も性質も付帯物においても……周囲のあらゆる物と全く正反対」な存在である。城はその名と外観からして若い生命力と夢とが脈打つ島の心臓部であり、表面上は死んだように見える石の島も実は活力あふれる生命体でその力がこの緑の城に集中してあらわれている、と考えることももちろん可能であろう。が、私としては、むしろ城の生命力あふれる外見こそ寓話的で人の目を惑わすものであり、その点で島と一体を為す幻想的な建物だと考えた方がよいと思う。二十年ぶりに島に戻った Pierston はこの城を夏の別荘として借りて住み洗濯女として城に通ってくる第二の Avice を見てはかつて自分の許婚だった第一の Avice がよみがえったと信じるが、それは島と城の不変性に惑わされた彼の幻覚にすぎず過去の二十年という時間は決して消し去れるものではないからである。

島の人々も石の家と同様に時代に遅れた古風な人々である。本土から隔離されているせいもあってこの昔気質の人々の間では古くからの島内結婚の風習が今も守られ、そのために島民の血が濃くなって顔立ちが非常に似通ってきている。このことは幼なじみの Avice とその娘、孫娘への主人公の愛が実は近親相姦的なもの、さらに言えば自己愛とも呼べるものなのではないかという興味深い問題を提起してくれる。そのことは後であらためて触れよう。

主人公の Pierston はその芸術家気質ゆえにハーディから「生粋の島民」と呼ばれながら、同時に芸術家であるゆえに故郷から疎外された孤独な人間として描かれている。彼は「地元の通行人とは思えない」「ロンドンかヨーロッパ大陸の都会から来た青年」と映る。「彼の都会人臭さは衣服として彼の体に乗っかっているにすぎない」のに昔の知人である島民にはそうは見えない。「まるで島の人間ではない」のである。彫刻家になるための教育と外の世界での生活が彼を生まれ故郷の石の島から疎外してしまったのだ。島の方も今の青年の目には奇異に映る。彼は島が自分の子ども時代の姿でなくそれより

ずっと前の姿をそのままにとどめている、超時間的な空間だと感じるのである。

この特異な島は彫刻家としての Pierston に重要な影響を与えている。島が芸術的インスピレーションの源となりうることは既に述べた通りで島の生まれである Pierston はもちろんその恩恵を受けたのであるが、島はその石を素材として提供することで物質的にも彼の彫刻を助けていたと言える。⁽⁴⁾ Pierston の父は島で有数の石商人で彼は幼い子どものころから父の石切り場の石を拾ってはおもちゃの兵隊やチェスの駒を作ることを覚えていったし、父が石を売って築いた資産で芸術家としての十分な教育と安定した生活とを保証されたのである。以来島の石は彼の彫刻の唯一の材料となり滅多に故郷に帰ろうとしないロンドンの彼も散歩の際などテムズ河の向こう岸の「父の石灰石が毎日何トンも陸揚げされる」船着き場を眺めるのである。

このようにして Pierston は芸術家であるゆえに故郷から疎外され、それと同時に芸術のインスピレーションつまり精神的素材と物質的素材に関しては島を頼らざるを得ず絶えずそこへ引き戻されている。それは Clym が自分の中の相反する二つの衝動——回帰願望と彼方のもの、より高いものへの憧れ——のディレンマに悩まされたのと同じである。そして Jude と同じように Pierston も「自分のものといえる魂の停泊地が無いままに社会を漂って」いく不安定な状態におかれている。彼を苦しめる「家庭生活の無い孤独」、不安定さは、しかし、彼を時に恋愛に走らせるのみでなく彫刻家として成功させた大きな要因のひとつでもあった。

恋愛と芸術活動は Pierston の内部で解き難く結びついている。彼の場合この二つの行為のエネルギー源は同じで、多産な彫刻家としての活動期の合い間合い間に恋愛の季節がやってくるのである。恋愛において彼の求めたものは彫刻活動において理想としたものと同じであった。それは即ち理想の女性美——ここでは 'the Well-Beloved' と呼ばれているもの——である。この点で彼は「幻想を追う人々が寄り集まる」Isle of Slingers の人間としてふさわしい生き方をしていると言えよう。The Well-Beloved は恋においても芸術においても 'the Well-Beloved' と自ら名付けた理想を追い求める男の物語であると定義することができる。そしてその追求の行為が無意味である、いや不毛であるところこそ大切な点であると私は考えている。

Pierston の 'the Well-Beloved'、つまり理想の女性のイメージは彼がほんの子どもころから一人の女性から他の女性へと移り住み続けている。彼は芸術家とし

ても男としてもそのイメージを追い続けているため一人の女を長く愛することができずにただ‘the Well-Beloved’の仮住まいの神殿として女の肉体を崇めるのみである。この奇妙なイメージの遍歴の中でも最も奇妙なのはそれが Avice という名の三人の女の中に二十年という長い間隔をおきながらも次々と棲みついたことである。第一の Avice は Pierston が二十歳代の駆け出しの彫刻家だったころに婚約した幼なじみの島の娘 Avice Caro であり、第二の Avice はその彼女が Pierston に捨てられた後に従兄と結婚して生んだ娘 Ann Avice Caro、第三の Avice はその Ann が島の若者 Pierston との間にもうけ主人公 Pierston に名付け親になってもらった Avice Pierston である。

Pierston は第一の Avice と婚約したものの、実は彼女に‘the Well-Beloved’が宿っていないのではないかとあやぶんで落ち着かない。そして間もなく知り合った Marcia という美しい娘の中にそのイメージが移ったことを確信した彼は衝動的に彼女と駆け落ちして Avice を捨てる。ところが皮肉なことに彼が Avice を本当に愛さなかった、彼女に‘the Well-Beloved’が乗り移ったのを確信できなかったということこそ、後に彼女が特別の存在だと彼に悟らせ彼女の思い出を神聖化し深く悔やませる原因のひとつになるのである。

すぐに Marcia とけんか別れした Pierston は彫刻活動に専心してその後の二十年間を過ごす、島の古い知人からの手紙で Avice Caro の死を知らされ突然彼女の思い出にとらわれ始める。実際の彼はロンドンの上流社会の晩さん会に在るのに「Avice Caro と、彼女とは切っても切れない島の昔々の情景とが鮮かに思い出されて」現実の光景は背景に沈んでしまう。彼は Avice の魂に包まれ島に戻ったように感じる。翌日急ぎ島を訪れた彼は Avice の墓の前で二十年前の彼女に生き写しの娘 Ann に会う。この後彼の心は Avice の思い出から解放されることがなく、Avice の娘と孫娘の二人を深く愛するが、二度とも彼の愛は成就しない。

「愛」という言葉を今繰り返した用いたが、本当は Pierston には真に一人の女を愛することができないのである。彼は単に自分の理想とする女性のイメージを愛しているにすぎない。ヴィナス神信仰は島の伝統でもあるが、芸術家として美の女神ヴィナスに仕えるのみでなく彼は男としても愛の女神ヴィナスに宗教的に仕えているのである。第一の Avice への愛は彼女が死んで肉体の無い魂となった時初めて燃え上がった「シェリー的」な愛にすぎなかった。「飛び去ってしまった魂に対するこの新奇な情愛の輝かしい純粋さ」に彼は酔いしれ、「肉体

は全く存在しない。純化され精練された至上の愛。今までこのような気持ちを味わったことがない」と思うが、それは相手が死んで神格化されているからである。第二、第三の Avice への恋愛も永久に失われてしまった第一の Avice の身代わりとしてでしかなくこの世で唯一愛さなかった女 Avice Caro に償いたいという気持ちによるものである。三人の Avice のうち一人として本当に彼に愛された者はいない。

だが第一の Avice がこれほどまで彼をひきつけるのは単にこの世で愛されず軽んじられたからだけではなかった。彼女は同じ島に生まれた人間、同類の魂を持つ女として特別な存在でもあったのだ。Pierston 自身早くから島の女は洗練されていないから愛せないが島の外の女もまたそのよそ者性ゆえに長く愛せないことに気づいている。島から疎外されて外の世界に生きる彼は心の底で帰りたいと思ひ島とのつながりを求めている。その願いは年と共に強まり、第二の Avice に出会った直後「無茶苦茶な望みが彼を襲った。芸術家としての名声などいらない。無知で無名でもいい、この島に住んで、近くの小屋に住むあのかわいい洗濯女に求愛し、もう少しで手に入れようとしている男になれば。」とまで思う。

しかし恋愛に彼を駆り立てる理想追求の衝動は彼の芸術活動の殆ど唯一の原動力でもあり芸術家として生きるために外の世界へ出てゆくよう彼をせきたてる。彼がもし島に帰れる、つまり自分の疎外を解決できるとしたら、その唯一の鍵は第一の Avice であつたのであろう。もし結婚するなら Avice Caro にしろという友人 Somers の忠告は正しかった。しかし Pierston は Marcia の中に美のイメージが宿っていると確信していたためにその忠告に従わなかった。‘the Well-Beloved’ はここでも Marcia の魅力的な姿を借りて彼を島から、第一の Avice から引き離していたのである。第一の Avice という絆をつかみそこねた彼は第二、第三の Avice を手がかりに島へ戻ろうとしても許されない。彼は第一の Avice を捨てた時に‘the Well-Beloved’に仕えて生きること、一人の男としてよりも芸術家として生きることを選んだからである。

だが美の女神に仕え肉体を越えた愛に酔いしれつつも Pierston は自分の理想とする美のイメージが生きている女や彫刻の像の中に具体化されるのを見ようとする。これはもちろん無理な相談である。現実の形に表わされた途端に理想は理想でなくなり、彼は相手の女や石像に幻滅する。また父の切り出す石を彫る彼は自分を疎外する島の石の中に疎外の原因である美のイメージを物質化しようとしているわけで、その結果としても自分の彫った

作品から疎外されてしまうのである。

三人の Avice から彼を遠ざけるもう一つの要因は近親相姦のタブーかもしれない。⁽⁵⁾ 第一の Avice と彼は閉鎖的な島の習慣のせいで血縁だったはずだし、第二の Avice は昔の許婚の娘だから彼にとっても娘のごとき存在である。彼女は次々に違う異性を愛するという島民特有の気質を彼から受けついでいる。第三の Avice は名付け子であり孫娘ともいえる。世代を追うにつれと彼の Avice への愛はより近親相姦的になり、自己愛に近付いてくる。彼の求める 'the Well - Beloved' も自己の理想イメージであり、彼の彫刻は自己を外部に投影しようとする試みとも考えられる。自己の完全表現は多くの芸術家の目指すところであるが、到底成し得ぬことであり、それ故 Pierston は似たような彫刻を繰り返し作った挙句に疲れ果て芸術活動を不毛なものとして放棄したのかもしれない。

第三の Avice が現われた時、Pierston はこれこそ自分の理想とする女 — 洗練された島の女 — だと思う。しかし、それは六十歳を迎え理想を追い求めることに疲れ果てた芸術家の目を通してであることを忘れてはなるまい。若い時の彼なら第三の Avice に 'the Well - Beloved' の影をみつめてこそすれ完璧さを見るなどということはなかったはずだ。あり得ないことだが完璧な作品ができたとしたらその時芸術は終わる。作品の不完全さこそ芸術活動を繰り返させている因なのである。年老い疲れ果てた Pierston は第三の Avice に完璧さを見出すことによって自分の芸術活動に終止符を打ち、結婚して平穩な生活を送れるようになることを望んでいるのだろう。しかし若い Avice は似合いの年齢の恋人の許へ走り、Pierston はこれは自分が昔許婚の Avice にした仕打ちのお返しだ、「時の復讐だ。」と呻く。

「時の復讐」はそれだけでは終わらなかつた。彼は Avice の出奔後間もなく重い病気にかかり、ようやく癒れてみると以前実際の年齢より二十歳は若く見えていた彼の顔は初老の男のそれに変わっている。Pierston 自身に関して最も奇怪なのはこの時まで彼が殆ど老いながったという事実である。特に第二の Avice に初めて会った時から病気になるまでの間彼は殆ど変化せず、彼と気質を同じくする第二の Avice が母親になることによって時の流れに否応なく巻き込まれてゆくことと実生活に根を下ろしていない彼が少しも変わらないことは好対照をなしている。まるで不変の島の産物であるために彼自身も老いることができないかのようである。彼の彫刻のスタイルも本人同様たいして成長しない。彼は生まれた島にまつられている美神ヴィナスに命じられるまま繰り返

し 'the Well - Beloved' の像を作り続ける。三度繰り返される Avice への愛は彼の芸術活動の繰り返しを反映し、愛においても彼は成長しない。いつまでも若いと言えば聞こえがいいが、実はあまりはめられたものではない。それに彼自身にとっても容貌の若さ芸術家としての若さは疲れ心をも安ませてくれない「呪い」なのである。外面と内面のズレ、世間が自分を見る目と自分が考えている自己の姿との大きな落差は彼を悩ませる。

先程第一の Avice は故郷を同じくする点で Pierston にとって特別の存在だと述べたが、彼女は過去つまり幼年期の思い出を共有することでもまた強い引力を發揮する。彼の彫刻そのものも島という場所のみでなく彼の過去の体験にも大きく依存している。Pierston は故郷に帰りた、過去に戻りたい（過ちを償いたいというものこれに含まれる）、つまり時間・空間両面で元に戻りたいと思う。そして島の変わらぬ外観はこの願いが実現するのかもしれないと彼に期待させる。だが生きている人間が時間の流れを遡ることは不可能である。結末の重い病はそのことを苛酷に示すもので、実際の年齢以上に老けた今、彼の帰郷は完璧とは言いがたい。余生の伴侶として彼の元へやって来るのは Avice の内の一人ではなく老いてもはや美しくなくなった Marcia である。「洗練された島の女」である彼女は、別れてからの四十年間に Pierston 同様人生を学び年老いて帰郷した点でも、また省りみられずとも互いの記憶の中に生き続ける形で過去四十年間を彼と共有した点でも、彼のパートナーたるにふさわしい。

最後の大病は容貌の若さを Pierston から奪ったのみでなく彼の中に燃えていた美を愛する心、芸術への情熱をも消し去ったが、このことは長い間精神的な不安定さに苦しんできた彼にとっては大きな喜びであった。彼は美しいものに関心がなくなり Marcia の老醜が気にならない。自分の作品を含め芸術一切と縁を切った彼は、島の古い井戸を閉じる作業に専念する。古い井戸は汚染の危険があるからというのである。

井戸は芸術家の創造力のシンボルと考えられる。島の古い井戸は「古い」からいけないのだろうか。それならば Pierston は井戸を塞ぐことによって年老いた自分は今も芸術から手をひくべきだということを示しているといえる。しかし、もし「井戸」そのものがいけないのだとしたら芸術そのものが有害だということになる。芸術は、少なくとも小説を書くことはハーディにとって Pierston の彫刻と同じく不毛な行為の繰り返しと見えてきたのかもしれない。

だが、だからと言ってハーディが芸術活動を無意味だ

ととらえていたと早急な結論を下してはならない。主人公の Pierston は芸術を捨てて昔と少しも変わらぬ島へ戻ったが彼自身はその間の四十年、特に最後の大病を経て外面、内面共に変わり、またいかに彼自身が捨ててかえりみないからといっても彼の芸術家としての生もその手の産み出した美しい彫像の数々も共に打ち消せない。それと同じように、Wessex 世界が化石と化してハーディが小説の筆を折ったとしても彼の生み出した小説の世界は時空を越えて存在し続ける。ハーディが小説を書くことをやめた後も文学に背を向けるどころか詩人に転じて多くの作品を生み出していったことは芸術に対する彼の肯定的な見方を示している。彼の詩については後日あらためて詳しく述べたいと思うが、ここでは詩の世界においてハーディは現実世界の時間や空間に縛られること少なく、過去や故郷へ自由に回帰した、いやむしろ過去と現在、此方と彼方とを融合させることに成功したとだけ言っておこう。詩の中でよみがえった Wessex の世界は *The Well-Beloved* の石の島のような不毛な死の土地ではない。回顧的な作家であるハーディは昔憧れた詩の世界に帰ることで自分の生み出した小説の世界である Wessex の存在を肯定し重要性を認め、それによって文学——芸術の存在意義を証明したのである。

註

- (1) Richard Benvenuto, "The Return of the Native as a Tragedy in Six Books," *Nineteenth Century Fiction*, vol. 26 (1971), p. 88.
- (2) Peter J. Casagrande, *Unity in Hardy's Novels*. (Lawrence, Kansas: The Regents Press of Kansas, 1982), p. 141.
- (3) Merryn Williams, *Thomas Hardy and Rural England* (London: Macmillan, 1972), p. 130.
Roy Morrell, *Thomas Hardy: The Will and the Way* (Kuala Lumpur: Univ. of Malaya Press, 1965), p. 64.
- (4) Casagrande, p. 117.
- (5) Hillis Miller, *Fiction and Repetition* (Oxford: Basil Blackwell, 1982), p. 159.